

# 概念体の構造 (8)

— 経済哲学のための構想 —

浦上博達

私たちの 19 世紀を特徴づけるのは、科学の勝利ではなく、科学に対する科学的な勝利である。  
ニーチェ『権力への意志』より<sup>(1)</sup>

科学者は、外部世界の実在の姿を漸次あらわにする研究方法を案出したと思われるだけでなく、科学的知識が、社会的ないし個人的影響による歪曲から例外的に自由となっているような、適切な形式の社会的組織を進化せしめたとも思われる……。マルケイ『科学と知識社会学』より<sup>(2)</sup>

## 目次

### 第 I 章 予備的考察

#### 第 1 節 認識の「性質」問題

#### 第 2 節 概念体の構造

1. 概念体の三層構造
2. 相互作用 (以上, 第 18 号)

### 第 II 章 三つの概念世界

#### 第 1 節 意義の世界

1. 「意義」について
2. 形而上概念とは (以上, 第 19 号)
3. 形而上概念の要請
4. 形而上概念の役割
5. 共同体紐帯概念としての形而上概念 (以上, 第 20 号)
6. 形而上概念の形成 (以上, 第 21 号)
7. ヘゲモニー的形而上概念の衰退 (以上, 第 22 号)

#### 第 2 節 論理の世界

1. 「論理」について
2. 論理概念とは
3. 論理概念の要請
4. 論理概念の役割 (以上, 第 23 号)
5. 論理概念の生成
6. 論理の世界の評価規準 (以上, 第 24 号)

#### 第 3 節 経験の世界

1. 「経験」について
2. 経験概念とは
3. 経験概念の生成 (以上, 本号)

### 第 III 章 三つの概念世界の相互作用

#### 第 1 節 意義の世界から

#### 第 2 節 論理の世界から

#### 第 3 節 経験の世界から

### 第3節 経験の世界

#### 1. 「経験」について

【経験は、狭義的には感官による刺激である】「経験」については、さまざまな定義が与えられるため、総括的な定義づけを行うとすれば、人間と環境との関係において含まれる総体を意味するが、本論文では、経験は感官による知覚に限定する。というのも、本論文での関心は認識論の分野であり、概念体における概念の性質<sup>(3)</sup>に関心を寄せるからである。最も原始的な<sup>(4)</sup>経験概念<sup>(5)</sup>とは、感官により受容された<sup>(6)</sup>刺激が記号付けされ<sup>(7)</sup>、それが社会的な過程を経て概念化(知覚)されたものである<sup>(8)</sup>。そこには实在物と概念を結びつける「観念」という介在物は介在しない<sup>(9)</sup>し、またそれに対応する「純粹な知覚」も存在しない<sup>(10)</sup>。

【言葉でとらえられたものは、つねに有限であり、相対化される】言葉(記号)が感覚的刺激に貼り付けられるということは、その対象がある特定の意味をもって有限化されるということである<sup>(11)</sup>。そして有限化されることによって他の対象と相対化される。

【感覚的刺激が概念になるためには、社会性が必要とされる】私的な感覚が概念化されるにはさらに社会的な同感が必要となる<sup>(12)</sup>。身体が受け取った物理的な感覚刺激は、そのうちのいくつかが社会的過程を経て記号を貼り付けられる。知覚による認識作用というのはこの概念化の作用のことである<sup>(13)</sup>。

#### 2. 経験概念とは

【概念が経験概念とよばれる境界は、相対的である】感官による刺激<sup>(14)</sup>が観察として表現されるには言語形式が必要となる<sup>(15)</sup>。こうして言語形式にはめ込まれて初めて刺激は経験概念になるとすれば、それには知覚されたときからすでに「性」を有していることになる。とすれば、「経験」概念とは、どの範囲のものまでそうよばれることが許されるのであろうか。還元主義的な立場に立つセンス・データは経験主義のドグマである、ことが暴露された以上は「経験概念」でありうる範囲は恣意的にならざるをえない<sup>(16)</sup>。

【経験概念は、物理的対象の存在を含んでいる】経験概念の範囲は漠然としたものであるが、しかし必要条件は示すことができる。それは、物理的対象からの感覚刺激を有している<sup>(17)</sup>ということである<sup>(18)</sup>。

【経験概念の实在性は、身体によって確認される】経験概念の経験性については相対的であるが、経験概念が物理的感覚刺激を含んでいるがゆえに、その实在は我々の身体によって確認される<sup>(19)</sup>。しかしながら、实在性が確認されるのは、その感覚刺激ではなく、物理的対象そのものである<sup>(20)</sup>。そしてその確認作業は身体の实在性によって保証されているのである<sup>(21)</sup>。

### 3. 経験概念の生成

【経験概念の生成は、ことばの修得過程である】 概念は、記号化されたものであるため、それは記号の修得過程であり、経験概念は、感覚刺激のことばとして記号化されたものであるから、経験概念の生成はことばの修得過程である。

【経験概念は、感覚刺激の記号処理によって生成される】 ことばの修得は、記号処理であり、記号処理能力が必要とされる。経験概念は、感覚刺激を記号処理することであり、そのために、主体は、記号処理能力を有している。特に、人間は種として言葉という記号処理能力を生得的に有している。そしてその記号処理能力は、名づけと同定という作用であり、原初的には音声処理であってその音声処理の繰り返しによって概念を生成する<sup>(22)</sup>。

【経験概念の獲得には、人間の働きかけがある】 経験概念の獲得は、言語の獲得を必要とし、そのために言語の獲得方法のうちで経験的な学習方法<sup>(23)</sup>に従う。ただし、言語獲得の経験的な学習方法は、環境にただ受動的であるばかりではなく、環境に対する人間の知的働きかけによって経験概念を獲得する。つまり、人間の種としての遺伝的な言語能力が物理的な対象からの刺激を記号処理することによって経験概念は獲得されるのである。

【経験概念には単なる名指し以上のものが含まれる】 感覚刺激を概念化したときには、感覚刺激の対象の単なる名指し以上にその対象の布置をも同時に指示している<sup>(24)</sup>。

【純粋な経験概念は、存在しない】 まったく純粋な経験概念は存在しない。感覚刺激に対応する概念化は、条件反動的であるが、それが単なる行動的反射にとどまらず概念化にいたるには、有機体が環境に対する古典的条件づけという受動的反応をこえて試行錯誤の過程で能動的に働きかける道具的条件づけ (instrument conditioning) 反応<sup>(25)</sup>が認められる。そのためにセンス・データをそのまま概念化した経験概念は存在しない<sup>(26)</sup>。

【概念のうち、物的な対象を指示できる概念が経験概念である】 唯一の経験は、感覚刺激であるが、この感覚刺激を概念化するについては物質的な世界のみでは不可能である。というのも、物質世界は、言語を有していないからである。言語は主体側の作業であり、そのために主体側のさまざまな要因が混入するが、それでも、概念のうちには物的対象を指示できる概念がある。そのような概念は、その概念の直接の対象は感覚刺激であるが、言語の使用として、そのような感覚刺激を引き起こした物的対象を指示するのである。経験概念はこのような概念として生成される。

【経験概念は曖昧である】 感覚刺激を言語化して、それで物的対象を指示するさいに用いられる言語は、感覚所与と言語ではなく日常言語を用いるために曖昧になる<sup>(27)</sup>。特に、経済学のように社会を研究対象とする分野において経験概念を生成するさいには避けられないことである。しかしながら、そこで生じる曖昧さを含んだ会話 (コミュニケーション) がむしろ重要なのである。

## 〈注〉

- (1) [13] <466> [下] p.13.
- (2) [12] p.60. 訳書 p.131.
- (3) 概念には、その性質に従って種々の概念があり、それらをその性質に基づいて三種に分類し、それが概念体(特定の思想・理論)の中でどのように用いられているかを分析することによって概念体の構造を浮き彫りにするというのが、本論文の目的である。そして概念の三種類とは、形而上概念・論理概念・経験概念である。但し、この手法は、分析道具的な手法である。
- (4) ここで「純粹」という用語法の代わりに「原始的」という用語を使用するのは、後述するように、感官による刺激が記号化され概念化されるさいには経験以外の要素が含まれるからである。従って、感官による刺激だけが記号化されたいわゆる「純粹な」経験概念は存在しない。例えば、(純粹な)感覚所与言語は、経験概念として生成もしないし人工的に創出もできない。
- (5) 例えば物理学者のアインシュタイン (A. Einstein) は、経験概念を一次概念として次のように述べる。「感官体験のつくる典型的な複合体と直接にかつ直観に結びついているような種類の概念を、一次概念とよぶことにしよう。他のすべての概念は — 物理学の見地からすれば — それらが命題によって一次概念と結びつけられるかぎりにおいてのみ、意味のあるものになります。」([1] pp. 212-213)
- (6) ここで「知覚」という用語の代わりに「受容」という用語をあえて用いたのは「知覚する」という用語自体に既に知覚する主体を想定しているからである。ロック (J. Locke) が「この知性 (the Understanding) は目に似て、私たちに他のあらゆる<sup>もの</sup>事物を見させ、知覚させながら……。」([9] p. 43. 訳書 [1] p.33) と述べたとき、ロックは既に知覚がその対象するものとして単に感覚的な刺激とは違うなにものかを想定しており、それらを「観念」とよぶことにしたのである。そしてロックは、知性の作用について、すべてではないにしろこのような過程において知覚主体はまったく受動的であるとし、「感官の対象は、その大部分が私たちの望むと望まないとはにかかわらず、個々の観念を心に押し付けるし、……。」([9] p.118. 訳書 [1] p.156) と述べる。
- (7) 認識主体は、感官に受容した刺激について符牒を添付していくのである。「さて、エホバ神は野のあらゆる野獣と天のあらゆる飛ぶ生き物を地面から形造っておられたが、人がそれぞれを何と呼ぶかを見るため、それらを彼のところに連れて来られるようになった。そして、人が、それを、すなわちそれぞれの生きた魂をどのように呼んでも、それがすべてその名となった。」(聖書：創世記第2章19) そしてこの個別化をはかると同時にその反対方向である類型化が進行する。こうして抽象名詞は、類似作用や類型化作用から生成されるのである。概念化される以前にまだ記号付けられていない裸の「観念 (idea)」があるわけではない。「白い馬」を指して「馬だ。」といえ、他の毛色をした馬は除外されてしまうが、「馬」は、「白い馬」・「黒い馬」・「栗毛の馬」などの個別化と同時進行する類型化から抽象化された記号であり、「馬」の(一般)観念 (idea) がア・プリオリに存在しそれを個物に当て嵌めたものではない。こうした抽象化の作用を認識主体がどのようにして獲得したのかについて、認識論上のいくつかの岐路が存在する。「我々の認識能力が個々の知覚から出発して一般的概念に達しようとする最初の努力をこうして追求してみることは、もとより極めて有益である。そしてあの有名なロックが、かかる探求にまず道を開いたことに対して、我々は感謝せねばならない。しかしア・プリオリな純粹概念の演繹は、ロックのような仕方では決して成立するものではない。かかる演繹は、この道にはまったく存しないからである。つまりア・プリオリな純粹概念を今後使用するとすると、経験からの出生を立証する証明書とは別の出生証明書を呈示しなければならない、かかる純粹使用は経験とはまったくかわりがない筈だからである。」([7] [上] p.164) として、カント (I. Kant) は、超越論への道を進んだ。カントにより批判されたロックは経験論への道を歩んでいたのである。またカントにも経験論にも批判的なローレンツ (K. Lorenz) は、動物学者であるという立場を堅持して「適合」という別の道を進む。「なぜ悟性の機能形式が実在の世界に適しているのかという問いは、ごく簡単に次のように答えることができる。すなわちあらゆる個別的経験に先んじて定

められているわれわれの直観形式とカテゴリーが外界に適しているのは、ちょうど馬のひずめが、生まれる前から草地に適しており、魚のひれが卵からかえる以前に水に適しているのとまったく同じ理由によるのである。(略)むしろ《水》という現象の背後にひそんでいる物自体に付随している何らかの特質の方こそがまさに、ひれという特殊な適応形式を生み出したのだということはまったく自明なことであり、(略)これほど多様な生物に対して、移動器官の調和のとれた形態と機能を規定したのは、明らかに水の持つ特質の方なのである。」([10] p. 229) と述べた後に、経験論のヒューム (D. Hume) に反対しア・プリオリなものを求めるカントに賛成しつつも物自体からの働きかけを認める点でカントと異なるのである。そして次のように述べる。「《純粹理性》もまた、その活動を通じて、つまり物の自体性との交渉を通じて、その相対的な完成状態へと到達してきたのである。かの超越論哲学者にとっては非理性的で、とりわけ外自然的なものであった物自体とその現象との間の関係は、われわれにとってはまったく実在的なものがある。決して物自体だけがわれわれの受容器を《触発》(affizieren) するのではなく、他方でまったく逆にわれわれの実行器が自分の側から絶対的な実在性を《触発》しているということも、きわめて確かなことである。《現実》(Wirklichkeit) は、《働きかけ》(Wirken) に由来しているのである。(略) むしろ、われわれの直観形式やカテゴリーといったものすべて、まったく自然的なものであり、あらゆる他の器官同様に、自体存在の法的な影響作用を受けとめ、かつ逆にそれを加工してゆくために、系統発生的に、《成立した》容器なのである。(略) 有機体的容器は、物自体に付随している特質に対して、実践的・生物学的に間に合っていけばよい、という仕方で適合していくのであり、その適合の仕方は決して絶対的でも、また容器の形式が物自体の形式と同じであると言えるほど正確なものでもない。」([10] pp. 232-234) そしてローレンツは、「われわれが忍耐強い経験的な研究生活の中で行おうとしていることは、われわれのいう意味でのア・プリオリなものについての研究であり、言いかえれば、人間より下等な物体、すなわち、物自体に付随している個々の特徴に対する対応関係が、人間の場合より稀薄であるような生物体における、《生得的》な仮説の研究なのである。」([10] p. 248) と述べる。こうしたローレンツの立場に対してピアジェ (J. Piaget) は批判する。「(ローレンツが人間の志向のア・プリオリ (a priori) な性格を主張したにもかかわらず) 『生得観念』(innate idears) は存在しないのである。論理でさえ、生得的ではなく漸進的な後成的構築によってのみ生じる。」([19] p. 114) つまり、「ローレンツは人間の基本的な認知構造は生得説であると考えている。水鳥は遊泳する以前に水かきを、馬は闊歩する以前に蹄をもって生まれてくるように、人間の思考も実際に思考できるようになる以前に思考に必要な諸観念、つまり生得観念を持ち合わせると考えた。しかし、人間には認識の諸カテゴリーがあらゆる認識に先立って生物学的に付与されているとすると、カントの先験的認識論に整合的な適応の生物学となるにしても、(個人の経験に先立つ) 認識のカテゴリーが系統発生的にいかにか獲得されたのかという問題に対しては、ネオダーウィニズムの進化論に忠実であろうとすれば、水かきや蹄の獲得と同じように、生得観念もまた突然変異と自然淘汰によって獲得されたと考えざるを得ない。しかしながら、遺伝子は、種に応じて変異するし、突然変異という偶然によって獲得された以上、ローレンツが言うところの生得観念は『そう考えることがその種の生存にたまたま有利であった考え方』という以上のものではなくなる。このことをローレンツも認め、『生得的作業仮説』とよんでいるが、ローレンツのこのような考え方は人間の論理数学的認識がもつ内在的必然性と統一性をいかに説明するかという問題を放棄している(あるいはローレンツの考え方では内的必然性と統一性を説明できない) とピアジェは批判するのである。」([19] p. 115) そしてピアジェは、「しかしア・プリオリな、もしくは生得的な認識構造も、やはり(人間の場合) 存在しない。ただ知能の機能だけが遺伝性のものであり、それが諸対象に向けて行使される継続的活動のある組織化を通じて、諸構造を生成するにほかならないのである。」([18] [上] p. 33) という構成説を主張する。本論文の立場は、基本的にはピアジェの対場に立っているが、但し次のトウルミン (S. Toulmin) の指摘に同意する。「人間という種が遺伝的構成要素からまねがれている——『人間の場合、生得的な認知構造は存在しない』——と、どうしておなじ程度の確信をもって言明できるのか。(この点については、『認知構造』が『論理的に

必然的な構造』だけを意味すると考えることにより、ピアジェは混同していると私は考える。)(引用者、一部修正) ([18] [下] p.306) なお、その信憑性については疑義がもたれているが、狼に育てられた子供たちを保護し養育したシング (J. A. L. Singh) 牧師は、その記録を次のような言葉で結んでいる。「私はいま、人間に関する二つの要因、すなわち、遺伝か環境の影響かといったことをいずれに決めるかは、あなた方にお任せしたいと思う。」 ([24] p.118. 訳書 p.180)

- (8) 私はできるかぎり「観念」という用語の使用を避けたいと思う。というのも、「観念」は認識論の構図をより明確に描写するために創りだされた道具的用語であると考えているからである。デカルト (R. Descartes) は、それまでの古い哲学用語であった観念を意図的に採用してそれに新しい使用法を与えたのである。([11] p.175) 二元論的な認識論においては、主体が対面するものとして対象の存在が必要であり、そのために「観念」が考案され、それがいつしか実在論として概念化の前の胎児とされたのである。この事情は経験論においても同様であり、ロックは、次のように述べる。「……私が考えたことへ進むに先だって、このさいまず初めに、読者は本論文でこれから見いだされるだろうが、観念ということばをひんばんに用いたことを読者に許していただかなければならない。このことばは、およそ人間が考えるとき知性の対象であるものを表わすのにもっとも役だつと私が考える名辞なので、私は心象、思念、形象の意味するいっさいを、いいかえると、思考にさいして心がたずさわることのできるいっさいを、表現するのに、このことばを使ってしまい、ひんばんに使わないわけにはいかなかったのである。」 ([9] p.47. 訳書 [1] pp.39-40) つまりロックは、知性 (the Understanding) の対象として「観念」という用語を使用した。そしてその存在を信じていたのである。「こうした観念が人々の心にあることは、よういに許していただけるだろうとおもう。だれも自分自身のうちに観念を意識するし、また、人々のことばや行動は、他人の心に観念があることをだれにも得心させるだろう。」 ([9] p.48. 訳書 [1] p.40) ヒュームは、観念について次のように考えていた。「およそ人間の心に現れる一切の知覚は、帰するところ、二つの別箇な種類となる。私はその一つを『印象』と呼び、他を『観念』と呼ぼう。両者の相違は、両者が心を打って思想乃至意識へ入り込むとき両者に伴う勢と生気との程度にある。」 ([6] p.311. 訳書 [1] p.27) そして極めて勢よく烈しい知覚は、印象と名づけることができ、「また私は観念を以て、思考や推理に於けるこれらの感覚・情緒・情感の淡い影像を意味する。」 ([6] p.311. 訳書 [1] p.27) 印象について再述したところでも次のように述べる。「印象は、二種類に、即ち『感覚』の印象と『内省』の印象とに、区分できる。最初の種類は、未知の原因から精神に原生的に起る。第二の種類は概ね観念から来るが、その順序は次のようである。即ち、印象が先ず感官を打って様々な種類の寒熱や飢渴や快苦を知覚させる。この印象は心によって模写され、その模写は、印象がなくなったのちも残る。これが観念と呼ばれるのである。」 ([6] pp.316-317. 訳書 [1] p.35) こうして「如何なる印象もひとたび心に顕れる時は、観念として再び心に出現するものである。」 ([6] p.317. 訳書 [1] p.36) これ以後、ヒュームは観念の結合・連合について述べていくのである。このようにヒュームにおいても、感覚的刺激としての印象 (impression) が「観念 (idea)」という用語に置換され、ロックと同様に「概念」に先立つものとして「観念」の存在が想定されてしまう。こうした立場は、言語的心理主義へとつながっていく。「近世以来の哲学の歴史においては、心理主義的な言語観が極めて優勢であった。心理主義的な言語観というのは、ことばの理解を、『心の中で〈意味〉を把握していること』として考えるような、言語観である。例えばジョン・ロックは、ことばを、心の中の『観念』の記号である (観念がことばの意味である) と考え、心の中でことばを一定の観念に結び付けることが、そのことばを『理解』することである、と考えた。」 ([28] p.151) 一方、合理主義においても、ローティ (R. Rorty) によれば、「デカルトその人は一方の足をいまだスコラ哲学の泥沼にしっかりと据えていると見た第二世代のデカルト主義者たちがデカルトの教説を純化し『規格化』してはじめて、われわれは『〈観念〉』という観念 ('idea' idea)』の十全な形のものを手に入れたのである。」 ([23] p.60. 訳書 p.43) 合理主義は基本的には意味の三項図式を採用する。意味の三項図式とは、以下の図1のように、「象徴」と「思想あるいは指示」との関係は「象徴する」ことであり、「思想あるいは指示」と「指示物」との関係

係は「指す」ことであり、「象徴」と「指示物」との関係は「代表する」ことを表わした図式である。

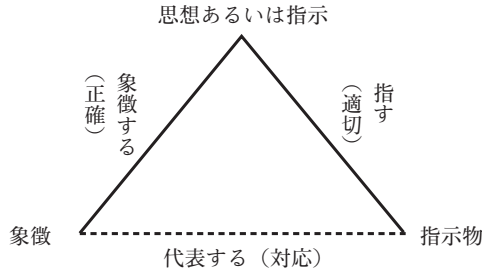
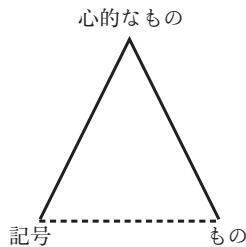


図1 意味の三項図式

([15] p. 11. 訳書 p. 56, より一部変更)

合理主義にあっては「思想あるいは指示」が「観念」に相当する。合理主義はこの「思想あるいは指示」の超越論的合理性を主張するのである。しかしここで注意を要するのは、象徴と指示物との底辺線が実線——それは「真理関係」を意味する——ではなく、点線——それは「想定された関係」を意味する——であるということである。つまり、「象徴と指示物との間には間接関係以外にとりたてるべき関係はない。その関係は誰かが象徴にある指示物を表させる時に生ずる。言いかえれば、象徴と指示物とは直接に連結されているのではなく（文法的理由のために、かような直接関係があるかのごとき言い方をする時には、それは単なる想定関係であって真の関係ではない）、ただ三角形の二辺を廻っての間接関係であるにすぎない。例えば、『犬』という言葉と、われわれがよく街頭でみかけ動物（犬という物）との間には、何ら直接の繋りは存しないということ、および両者の間に在る唯一の関係は犬を指すときにこの言葉を用いるということだけであるということは改めて述べるまでもない。しかしながら、言葉と事物との間に直接の意味関係があるという従来の定説が表わす一種の単純化こそは、われわれが物を考える時に遭遇する、ほとんど一切の困難の源である。」([15] pp. 11-12. 訳書 pp. 56-57) このような見解は、一元論とか、「観念」を虚構だと考える陣営にとってはさらに問題を孕むことになる。一元論の立場に立つ大森は次のように反論する。「例えば、『犬』という語をとってみよう。そしてあの『物 ⇔ 記号』あるいは『名 → 名指し → 物』の図式をあてはめようとしてみよう。つまり、『犬』は何の記号であり、何を名指しているのかを考えてみるのである。『犬』が個々の犬、ポチやクロの名前でないことは言うまでもない。(略) そこで『犬』の名指しの宛先が探されたとすれば、上述した何かの心理的なものが『指名』されるのは当然であろう。『犬』は犬の概念、犬の表象、犬のイメージ等の『名前』なのである、と。事実ソシュール、オグデン、リチャードを始め、あるいは彼等になって多くの言語学者はそう言っているのである。しかし、これがおかしいことは一目瞭然ではあるまいか。(略) 『名 → 名指し → 物』の図式がここでは働かない、というよりは破壊的、致命的に働いていることは誰の眼にも明らかであろう。この直線図式をオグデン、リチャードのように真中で折れ目を作って、



としてもそれによって破壊力を半分にすることすらできない。(略)『犬』の場合、その『名指される物』を外界の見たり触れたりできるものの中に見付けられなかったので、『心的なもの』を『指名』したのである。それは主役がいなくてやむなく指名された代役なのである。だからその代役がこんどは主役を指名するというのは全くの錯乱である。」([17] pp. 159-161) もちろん、この大森の批判は、「犬」という抽象名詞もしくは集合名詞についての批判であるが、経験概念についてもその対象として「観念」・「表象」・「イメージ」・「印象」などがしばしば持ち出されるが、経験概念は、その内容は感覚刺激であっても、会話としては物理的対象を指示しているのである。

- (9) クワイン (W. van O. Quine) は、観念について次のように述べる。「ところで、この観念という観念、言語的形式の心的対応物という観念は、言語科学にとって無価値というよりも一層悪い (worse than worthless) と考える点で、現代の言語学者は大部分一致している。観念について語ることは心理学にとってさえ害となると考えている点で、行動主義者は正しいと私は考える。観念という観念の悪弊は、モリエールの芝居に出て来る嗜眠力のように、それを使えば何か説明されたかのような錯覚を生み出す点にある。そして、この錯覚は次の事実によって強化される。すなわち、全体が曖昧模糊とした状態に落ち着くために、ある種の安定性 — 言い換えれば、それ以上の進歩が望めないこと — が保証されるのである。」([22] p. 48. 訳書 p. 72)
- (10) 大森は一元論の立場からではあるが、次のように述べる。「そして机のこの知覚正面からそこに籠もっている知覚的思いの汚染を洗い流そうとする試みはすべて、かつての実証主義者の『感覚と件』やフッサールの『感性的ヒュレー』の誤りに帰ることになるだろう。質料を形相 (エイドス) から、ヒュレー (素材) をモルフェー (形態) から、感覚と件を概念規定から分離析出することは絶対不可能である。だが、だからといって知覚と思いとの分別をも廃すべきだということにはならない。(略) ただ全く純粋な知覚的立ち現われとは、感覚と件と同様考えることのできぬものであり、すべての知覚は思いのこもった知覚である、このことを忘れてはならない。いかなる知覚も思いをこめての知覚なのである。」([17] p. 216) さらに、この文章の注記として次のように述べる。「心、頭、と言ったがこれは慣用句を使っただけで『思い』の登場する特別舞台があると考えているのではない。『思われた』机は頭や心にあるのではなく、百貨店や隣室にあるのであり、あるいは、数年前私の部屋にあったのである。」([17] p. 216) 感覚と件は物理的には身体的な反応であるが、我々は、感覚と件を表示した記号を、感覚と件を指示するのではなく、感覚と件の対象を伝達しようとするために用いるのである。
- (11) 有限化されるということの背後には、無限的なものの存在を前提にしていることになる。このような推論は、カントの物自体に繋がる。カントによれば、「このような理由から、かかる物の現われであるところの現象の形式については、多くのことをア・プリオリに言い得るけれども、しかしかかる現象の根底にあると思われるところの物自体については何ごととも言い得ない、ということである。」([7] [上] pp. 114-115) そして「感覚の対象に 具わって いて しかも それ自身 は 現象 で ない ところ の もの を、私は可想的と名づける。」([7] [中] p. 211)、として物自体の原因性を想定するのである。感覚的刺激の記号化 (言葉化) された対象 — カントの用語を用いれば、ア・プリオリな感性の形式 (純粹直観: 時間と空間) によってとらえられる対象 — は実在であるが、それ以外にはそれ自身についてア・プリオリにはなにごとともいえないのである。もし理性がそれ以上のことを述べれば、それは理性使用の越権行為となる。本論文もこの点ではカントの立場をとる。つまり、物自体 (事物) の存在は認めるという素朴実在論の立場には立つが、同時にそれ以上にア・プリオリには物自体について何も知りえないという不可知論の立場に立つ。
- (12) 黒田によれば、一定の視覚体験に触発された反応をじかにその物理的原因に向け返す、という動作を慣習的・制度的に繰り返しながら社会的に類型概念は定着するのである。「物理的実在としての蝮と、感覚的な蝮体験とは明らかに別箇の事実でありながら、太古から繰り返されてきた知覚因果の経験の制度化により、すでに概念的、意味的に結びついている。そのためにわれわれは、一定の視覚体験に触発された反応をじかにその物理的原因に向け返す。知覚のこの仕組みを慣習的、制度的な要因



から切り離し、すべてその場の志向作用に帰着させる知覚解釈は、たとえば『投射 (projection)』の困難に代表されるような物心二元論の陥穽に落ち、そこから抜け出すことは難しいだろう。」(〔8〕 p. 29)

- (13) ロックによれば、感官の対象が観念を心に押し付けるさいには知性の作用は全く受動的としながらも、知性は様々な作用を行うとされている。「この『人間知性論』で論究されている対象は、その題名の示すとおり、人間知性である。知性 (understanding) はおよそ人間の知り理解する営みの総称であって、感覚的知覚も内生的知覚も論理的思考もすべて知性の具体的な働きである。」(〔9〕 訳書 [1] 解説 p. 301) つまり知性は知覚 (perception) 作用を含むが、知覚作用としての知性のもつ機能は受動的なのである。「単に生の [それだけの] 知覚では、心 (the Mind) は大部分ただ受動的で、その知覚するものを知覚せずにはいられないのである。」(〔9〕 p. 143. 訳書 [1] p. 201) ここでは、心は知性であり、その心にあたかも写真の乾板のように感官から刺激が焼き付けられて、それを知性が処理するといういわゆるタブラ・ラサ (tabula rasa) のメタフォが語られているのである。
- (14) 一般的に感覚与件 (センス・データ) は、直接経験を指示していると考えられ、それから感覚与件言語が主張された。感覚与件言語論者であるエイヤー (J. Ayer) によれば、「これらの (引用者注: 『感覚所与の理論』を採用してきた) 哲学者たちがふつう示している感覚所与の定義というのは、感覚所与とは感覚—知覚において人が直接に覚知する対象である、というものである。」(〔2〕 p. 59. 訳書 p. 58) としたうえで、「それは啓発的ではない…。(略) 私が考えるに、われわれは何かの対象を直接に覚知するとふつう言うのは、その対象が存在するという信念が感覚—経験に基づいていて、しかも推論という意識過程をまったく含まないときである。しかし『直接的な覚知』がこの意味で使われるなら、われわれは椅子やテーブルやペンのような物質的事物を直接に覚知するというのも真となる。 (略) そしてこのやり方によって、われわれは物質的事物が存在するというあまたの信念に到達する。しかし、感覚所与とは人が直接に覚知することのできる対象であると定義する人たちが主張するのは、概して、テーブルやペンのような対象は直接には覚知できない、ということなのである。そして彼らがそう主張する理由は、そのような事物の知覚はつねに人を欺くかもしれない、ということなのである。(略) 答えて言うならば、『感覚所与』ということばかあるいはそれと同義の用語を導入し、そしてそれを私が示した仕方を使うことによってかれらはその値を出すということになる。つまり、『直接的な覚知』という表現と『感覚所与』という表現は相関的とみなされるべきである。」(〔2〕 pp. 59-61. 訳書 pp. 58-60) として、真偽の問題とは隔離された言語の問題として、言語論的に感覚所与を覚知の対象と定義するのである。こうしたエイヤーの感覚所与言語を徹底的に批判して、オースティン (J. Austin) は、次のように述べる。「エイヤーの答えは明白である。— 経験的事実とは、感覚所与についての事実である。あるいはまた彼は、『現象 <phenomena>』、『可感的な現われ <appearance>』のあり方について』の事実とも言う。これこそが、われわれが『経験的証拠』と本当に出遭うところなのである。彼の見解 — 彼の本当の見解 — によれば、それ以外の『経験的事実』は全くない。唯一不動の事実は、感覚与件がある、ということである。感覚与件というものが存在し、それはあるがままにあるのだ。それ以外のどのようなものを、われわれがあたかもあるかのごとくに語ろうとするかは、純粋にことばの便宜の問題にすぎない。しかし、『そういった表現によって指示すべく、われわれが意図している事実』は、常に同一である。すなわち、感覚についての事実である。」(〔3〕 p. 60. 訳書 pp. 92-93) そして続けて、「パークリの説によれば観念のみがあり、カントの説によれば表象 <Vorstellungen> のみがあり (物自体は、厳密に言えばここでの問題に関与しない)、そしてエイヤーの説によれば感覚与件のみがある。— しかし、パークリ、カント、およびエイヤーは、さらに、われわれは、あたかも物体、対象、物質的なものがあるかのごとくに語ることができる、という点でも一致している。たしかにパークリ、カントは、エイヤーほどリベラルではない — 彼等は、可感的多様と歩調が合っていれば、あとは全く好きなように語ってよい、とは言わない。しかし、もしこの点で、私がどちらかに味方しなければならぬとしたら、私は、パークリとカントの方に味方すべきだと思う。」(〔3〕 p. 61. 訳書 p. 94) また、感覚与件論に対する批判として大森は二元論の立

場にたつ表象主義を批判して、対象を「知覚する」ということについて次のように述べる。「何でもよい、例えば机とか樹木とか人体とかの『物』をわれわれは知覚する。例えば『見る』のである。そのとき『見えたもの』、例えば机の見え姿を『物』とは性格を異にする何ものか、例えば『知覚像』『表象』『イメージ』とかと考えるのが表象主義であり、それが根本的な困難に導くことには村田も同意しているようである。では、それをどう考えればいいか。私は常識に従って、或る視点から見えた『机』である、といたい。つまり、『物』としての机が『じかに』見えている、という単純な素朴な言い方をとるのである。そして話の便宜のために、それを『机の知覚風景』『机の見え姿』、そして『机の(知覚的)立ち現われ』と呼んできた。何はともあれ物としての机と一応区別する必要があるからである。例えばそれらは物としての机のようには持続しないし、重さを測れず、かついで移動することができない、という点で机そのものとは違っているからである。」([14] pp.112-113) こうした感覚与件については対立はあるが、経験概念の生成の範囲内では、概念化の唯一の胚種は感覚刺激である。エイヤーの述べるようにこれ以外に経験はない。そしてその点では大森も同じ立場である。しかしながら、問題は、それが概念化(言語化)されるととき、エイヤーの言うような言語の選択の問題でもなければ、自分個人にとってものがどのように立ち現われているかと言うような問題でもない。エイヤーが考案する感覚所与言語もまたエイヤーが批判する物理言語も不可能であるし、また現象的な立ち現われの姿をそのまま陳述したものでもない。というのも、言語化は主体からの記号化であり、そこには主体の働きかけがあり、さらに言語は語りかける相手を想定した会話の手段である。ある概念がたとえあるグループのみだけで通ずる言語であっても公的でなければ言語ではないからである。つまり言語は社会で生成される社会言語でなくてはならないのである。

- (15) マルケイ (M. Mulkey) によれば、「たとえば写真や網膜像の視覚的な形をとった、純粹で単純な表象は、それだけでは何ら言語的要素を含まない。(略) 網膜像は世界について何ごととも主張しない。しかしわれわれの見るもの、観察するものは、われわれの命題的知識に重要な関連をもつ。見るものが、観察者の自由になる範疇に影響されぬ、純粹に視覚的な現象であるならば、われわれの眼で見るものはすべて、世界についてわれわれが知るものと何の関連をも持たぬことになるであろう。『そこでわれわれの視覚はまずもって言語形式にはめこまれていなければならず、しかる後にはじめて視覚は、われわれが真と知るものによって考察されることができるのである。視覚がそのようにして考察されうるまでは、それは観察ではない……』(N. Hanson 1974 (ママ), p.127)。」([12] p. 45. 訳書 pp. 101-102)

- (16) ポアンカレ (H. Poincaré) は、「科学的事実は、なまの事実を別の便利な言葉に翻訳したものに過ぎない。」([20] pp.242-243) と考えているが、「なまの事実と科学的事実との間にははっきりした境界がない。一定の事実についてのある述べかたがこれこれの述べかたよりももっとなまであるとかあるいは反対に、もっと科学的であるとか言うことができるだけのことなのである。」([20] p.246) ここでポアンカレの用いた「科学的事実」とはすでになんらかの理論的背景によって固定化された事実であるが、しかしながらそれでも「なま」に近い事実の存在を認めているのである。「なま」ということだけに関してみれば、それは感覚的な物理的刺激であるかまたはカントの「物自体」ということになる。しかしながらわれわれは物理的な刺激は「知覚」することでもないし、また「物自体」ならばカントが主張したように認識不能である。そこで我々は、「なま」ということを感じるときには、物理的感覚刺激の強さを感じていることになる。クワインならば「感覚的周縁からの近さとか遠さ (varying distances from a sensory periphery)」([22] p. 43. 訳書 p.64) と表現するかもしれない。そしてクワインは、ある言明体系に対して「しつこく反対してくる経験 (recalcitrant experiences)」([22] p. 43. 訳書 p.65) の存在を認めるのである。理論負荷性を主張するハンソン (N. Hanson) は、「私は、網膜反応的に『見ること』や感覚与件的に『見ること』が、せいぜいのところ見ることの画像的説明に過ぎないことを示そうと思う。」([5] p.125. 訳書 [上] p.187) 「しかし、言語とは単に一種の画像に過ぎないのか。私はそうは思わない。言語の特性および用法と画像の特性および用法との間には、基本的な論理的差異がある。私は今やこれらの差異を際立たせ、言語と画像

とを二つにもぎ離そうと思う。(略) もしこのことをなしうるなら、私は可能だと思うのだが、科学的知識は網膜像ないし心像と呼ぶ視覚的経験の生起からもぎ離されることになる。もしそうなれば、われわれが知ることと網膜ないし感覚与件の画像として経験することとの間の大きな裂け目がはっきりするだろう。」([5] p.137. 訳書 [上] p.205) もちろんこうした主張は、語や概念については文についてであるが、次のハンソンの述べたことは、私には語や概念についても妥当すると考えている。「感覚与件の経験と感覚与件を表す文とは、画像が言語から離れているのと同じくらい離れている。」([5] p.145. 訳書 [上] p.215) つまり、物理的な感覚与件とそれを表現した概念は、神が聖像 (icon) から離れているのと同じくらい離れている。

- (17) クワインは、翻訳の場合、例えば原地人が発した言葉が「うさぎ」であることの同意を求めるのは、うさぎそのものではなくて刺激であるという。「'Gavagai' の使用は 'Rabbit' の使用に相当する、と試験的に扱う際、つき合わすべきものは刺激であって動物 [そのもの] ではない。」([21] p.31. 訳書 p.48) しかしながら、経験概念にあっては、いまそこで跳ね飛んだ生き物を原地人が 'Gavagai' と叫んだとき、それが 'Rabbit' であり、次に 'Rabbit' が跳ね飛んだとき、それは 'Gavagai' かと訊ね、そうだとすれば 'Gavagai' を 'Rabbit' と翻訳することになる。このような観察の場合には、この両者は私が感じた刺激とあなたが感じた感覚刺激を対比しているのではなく、両者の目の前の動物について話合っているのである。つまり経験概念は物理的存在と切り離されるような感覚刺激だけを内容とするのではなくその対象とされた物理的な存在を話題にしているのである。
- (18) クワインは、翻訳の不確定性を取り扱ったさいに、観察文を概念体系の「ふち」として述べる。まず、「要するに『刺激意味』とは、どのような感覚的刺激があればその文を肯定し、どのような感覚的刺激があればその文を否定するのかを、まとめたものである。」([28] p.171) とする。続いて、翻訳の不確定性を論ずるさいに、発話と同時に生じている事態に直接にかかわりをもつ文を「場面文 (occasion sentences)」とよんだ。さらにクワインは、彼の物理主義傾向を次のように述べる。「刺激意味のなかには、干渉的情報の影響を比較的受けにくいものがある。この点で 'Red' [「赤い。」] と 'Rabbit' [「うさぎだ。」] との間には、(たとえ、'Red' も 'Rabbit' と同様、物理的対象の持つ持続する客観的特性を報告しているのであって、刻々過ぎゆく感覚所与を報告しているのではない、と考えると) 重要な差異が見られる。確かに、奇妙な照明法や並置の仕方についての付帯的情報から、ある物が赤く見えなかったが本当は赤いのだということ (あるいはその逆のこと) に納得させられるような極端なケースもある。しかしそれにもかかわらず、ちらりと見えたある物が赤いか否かを決定する際には、それがうさぎか否かを決定する際ほど付帯的情報の働く余地が多くないのである。したがって 'Red' は、刺激意味の同一性が、同義性について直観的に考えられているものに近づく珍しいケースである。」([21] pp.40-41. 訳書 p.64) こうして「場面文」のなかに、付帯的情報の少ない「観察文」を認めるのである。「『観察文』とは、このような人々の背景的な知識をできるかぎり取り除いた、いわば『純粹に』その場の観察可能な状況と対応することを意図した文である。ホーリズムの言語観において、体系の『ふち』と呼ばれたものが、これにあたる。そして、ここで重要なことの一つは、『観察文』が、『センス・データを記述する』文といった仕方ではなく、あくまでも人々の言語的ふるまいとその社会的な一致によって規定されていることである。言語学者は、ある文が『センス・データを記述している』かどうかを調べることはできないが、人々の言語的なふるまいとその社会的な一致を調べることは、できるのである。そしてクワインは、言語学者が現地語を自国語に翻訳するとき、観察文については、現地人達が共有するその刺激意味と同じ刺激意味をもつ、自国語の観察文に翻訳すればよい、と言う。つまり、観察文については、同じ刺激意味をもつ範囲内に、翻訳は確定する、と言うわけである。」([28] pp.173-174) そして「付帯的情報の影響を受けても刺激的意味がなんら変化しないような場面文は、観察文 (observation sentences) と呼ばれるのが自然であり、その刺激意味はこれら観察文の意味を非の打ちどころのないほど正当に扱っている、と言っても矛盾の恐れはないであろう。観察文は、持っている意味をあげすけに見せている場面文なのである。」([21] p.42. 訳書 p.66) と述べる。しかしながら後に、「先に述べたようにクワインは、こと

ばには〈一定の意味〉があり、その〈一定の意味〉のおかげで、言語的なコミュニケーションは可能になるのだ、という考えに反対している。しかし、観察文についてだけは（少なくともつい最近まで）、それぞれ〈一定の意味〉をもつ、と考えてよく、その〈意味〉とは、その観察文の刺激意味なのだ、と考えていた。（略）一カ月後、『君はビックリするかもしれないが、君の言うことに基本的に賛成する。自分は一年前から、観察文の様々な程度の理論負荷性を認めるようになった』という手紙をいただいたのである。』（[28] pp.176-177）

経験概念についても物理的感覚刺激を表明する概念が他の人の同意を得られるか否かによってその感覚与件を同定することになる。しかしながらそこではクワインの主張である翻訳の不確定性原理（[21] p.27. 訳書 p.42）や指示の不可測性に遭遇するが、同定の確認作業は翻訳目的の実用性を有していれば厳密なものでなくてもよい。

- (19) クワインは、物理主義の立場から次のように述べる。「したがって、外的事物は究極的にはわれわれの身体への作用を通じてのみ知られうるという命題は、当座は疑問視されない物理的事物について（物理学のであれ、どこのであれ〈in physics and elsewhere〉）いくつか立ち並ぶ種々の真のうちの一つと見なされるべきである。それは、指示対象そのものは問題視しないが、物理的事物についてのわれわれの語り方の経験的意味を限定する。」（[21] p.4. 訳書 pp.6-7）
- (20) ショーペンハウアー (A. Schopenhauer) は、悟性の唯一の機能は因果性であり、結果から原因を認識することを直観とし、最初で最も単純な現実世界の直観としてその客観性の保証を身体に求める。「なにかしらある結果（もしくは作用、働き）が直接に認識され、それが出発点として役立つことがなければ、原因の認識にはとうてい至り得ないであろう。ところでこの出発点として役立つのは、動物の（人間も含む）身体に対する作用であろう。そのかぎりでは、身体とは、主観にとって直接の客観である。あらゆる他の客観を直観することは、身体によって媒介されている。」（[27] p.124）続いて、「身体はわれわれにとって直接の客観である。主観の認識の出発点をなしている表象である。（略）しかし悟性のそもそもの出発点をなすなにか別のものがほかに存在しなければ、悟性が（結果と原因に）適用されるには至らないだろう。この別のものとは、たんなる感性的な感覚、身体が受ける変化の直接の意識のことであって、この意識があるおかげで、身体は直接の客観といえるのである。（略）身体のごうした直接の認識は、悟性の適用をまだ受けていない感性的な感覚なのであって、ごうした直接の認識を通じて身体そのものがことばの本来の意味で客観としてそこにあるわけではなく、そこにあるのはようやく、身体に影響を及ぼしつつある物体であるからである。それというのも、ことばの本来の意味での客観の認識、すなわち空間における直観的な表象は、ただひたすら悟性によってのみ、また悟性によってのみ存在し、悟性の適用以前にはではなく、その適用の後にはじめて成立するからである。それゆえに身体が本来の意味での客観として、すなわち空間における直観的な表象として、他のすべての客観と同じように認識されるのは、身体の一部の他の部分に対する影響に因果律を適用することによって、ようやく間接的にであって、それはつまり眼が身体を見たり、手が身体に触れたりといった方法によってなのである。であるから、単なる一般感情によっては、われわれには自分の身体の形もわからない。ひとえに認識によってのみ、表象においてのみ、すなわち脳髄のなかでのみ、自分の身体もはじめて延長したもの、四肢をもったもの、有機体的なものであるとわかってくるのである。（略）だからわれわれが身体を直接の客観と名づけているにしても、それは以上のような制限つきで理解されなければならない。」（[27] pp.135-137）
- (21) ショーペンハウアーは、身体による客観性（[29] p.4.）と同時に主体からの働きかけを認めている。「だからわれわれは自分の身体をすらもこの見地からは表象と名づけるのである。もっとも身体だけは直接的な客観とよばれるべきものなのであるが、それにしてもさまざまな客観のなかのひとつの客観であることに変わりなく、やはり客観の法則に支配されている。」（[27] p.114）ここで「客観の法則」とは、ショーペンハウアーの『根拠律の四つの根について』で述べられている主観による先験的な客観化の形式である。そして、「有機的な身体が他のすべての客観を直観するための出発点であり、したがって直観を媒介するものであるかぎり、わたしはそれをこの著作の第一版においては

直接的客観と名づけた。しかしながら、この表現はきわめて非本来的な意味でしかあてはまらない。(略) なぜなら、その場合身体は意識にたんなる感覚を提供するだけだからである。身体もまた客観的に、つまり客観として認識されるが、それは間接的にでしかない。それは、身体も他のすべての客観と同様、悟性ないし脳(これらは同じものである)において、主観的にあたえられた結果の認識された原因として、しかもまさにそのことによって客観的に呈示されることになるからである。([26] p. 115) つまりショーペンハウアーによれば、「物質が直接の客観(身体のこと)に対して[その直接の客観自体がすでに物質なのであるが]なんらかの働きかけ Einwirkung をおこなうことが、直観をひき起こすのであり、物質が存在するのはひとえにそのような直観の中だけである。」([27] p. 120) こうしてショーペンハウアーは、「哲学教授たちの教授哲学ではなお依然として、外界を直観するのは感官の仕事であると説かれ、そのあとで五感のそれぞれについて長たらくあれこれが論じられてゆくことであろう。それに対して、直観の知的性格について、すなわち、直観が主として悟性の仕事であり、そして悟性はそれに固有の因果性の形式と、それに従属している純粋な感性の形式、つまり時間および空間を介して、感覚器官における若干の感覚という生の素材からはじめて客観的な外界を生み出すということについては、一言も語られていない。」([26] p. 73) と批判するのである。つまり、「感覚が提供するのは生の素材<sup>なま</sup>だけであって、悟性がはじめてそれを前述の諸形式つまり空間、時間、因果性を介して、合法的に規定された物体界の客観的の把握につくり変えてゆく。」([26] p. 76) ことになる。

- (22) この点において私はチョムスキー(N. Chomsky)とは逆の立場に立つ。チョムスキーは、言語の分析を二つに分ける。すなわち、「略言すれば、言語は内的面と外的面をもつ。」([4] p. 79. 訳書 p. 43) とし、続いて、文についてであるが、「文は、いかにしてそれが思考を表現するかの見地からか、もしくは、その物的姿の見地からか、すなわち意味解釈か音声解釈かのいずれかの見地から研究され得る。」([4] p. 79. 訳書 p. 43) とし、文の「深層構造(deep structure)」を「表層構造(surface structure)」から区別して、深層構造に横たわる文法(思考の形式)が抽出されるのである。しかしながら、経験概念の生成にあってはその過程は逆であり、感覚刺激が記号化される過程で概念が生成されるのである。もちろん、それにはすでに主体に名づけて同定するという記号操作の能力が生得的に準備されているが、生得的といえるのはそこまであって、文法は記号操作の繰り返しによって生成されると考えている。
- (23) 言語の発生について生得説の立場をとるフォーダー(J. Foder)は、学習理論を否定する。「ある意味では、学習理論は存在しないように私には思われる。」([18] [上] p. 163) と述べた後に、概念の獲得についてと信念の固着とを区別し以下のように述べる。「諸概念の起源がどういふものかについて、根本的に生得説の立場に立たなければならない。要するに、これまで発展を加えられたいかなる学習理論も、私の知る限り、どのように概念が獲得されるかについて、説明してはいない。これらの理論は、むしろ信念が経験によって固定化される方法をのべており、それらは本質的に帰納論理学である。信念が経験によって固定化される方法を示すこの種のメカニズムに意味があるのは、根本的な生得説を基礎にする場合だけである。これが私が擁護しようとする立場である。」([18] [上] p. 163) こうした生得説の立場を主張しつづけたチョムスキーも、一方それには与せず構成説の立場をとるピアジェも共にその狙いは経験論の否定にある。インヘルダー(B. Inhelder)によれば、「ピアジェは構成説を主張し、チョムスキーは生得説の位置をとっている。この両者は、討論のなかできわめて異なった視点から、彼らの見解を提示したのだが、その視点は、彼らが実際にはおなじ敵を攻撃したのだという事実を隠してしまう恐れをもっている。その敵とは、あらゆる形態での、またあらゆるニュアンスを帯びた経験論のことである。チョムスキーは『言語行動』の行動主義的アプローチを一撃のもとに抹殺し、ピアジェは、論理的経験論にとどめの一撃を与えるために、数十年にわたって、認識論的な議論に没頭してきたのではなかったか。環境のあらゆる源泉だけでは、その生涯の数年間の、子どもの言語と思考の形成に内在する自発的創造性を説明することはできない。」([18] [上] p. 149) ピアジェの構成説とは、次のようなものである。「五十年にわたる経験が教えてくれたところを

よれば、主体の活動性に帰すべきある構造化を欠いた、単純な観察の記録に由来する認識は実在しない。しかしア・プリオリな、もしくは生得的な認知構造も、やはり（人間の場合）存在しない。ただ知能の機能だけが遺伝性のものであり、それが諸対象に向けて行使される継続的活動のある組織化を通じて、諸構成を生成するにほかならないのである。その結果、心理発生の諸データに合致する認識論は、経験論的でも前成説的でもなく、新たな諸操作と諸構造の連続的構築をとまなう、構成説から成り立つ以外にありえない。つまり中心的問題は、そのような創造が実行される方法を理解すること、それら創造が事前に決定されていたわけでない諸構成に起因しながらも、結局は論理的に必然的なものになりうる理由を理解することにある。」（[18] [上] p.33）このようなピアジェに対して、チョムスキーは生得説の立場から次のように述べる。「認識の心理発生とその認識論的範囲についての興味深い指摘のなかで、ジャン・ピアジェは認識の獲得の様相に関する三つの一般の見地を定式化して見せている。すなわち経験論、『前成説（『生得説』）』、および彼自身の『構成説』の三つである。彼はきわめて適切にも、私の見地を、彼の語句を用いるならば、ある形式の『生得説』として性格づけている。人間のことばを研究してみると、私はまさしく遺伝的に決定されたある言語能力を考えざるをえなくなるのだが、その能力とは人間精神の一構成要素であり、『人間として使用可能な文法』のあるクラスを明確に示すものである。子どもは自分に使用可能な限定されたデータから、これらの文法のひとつを…獲得する。（略）この文法は、彼の『内在的言語能力』の表示である。その言語の獲得において、子どもはまた、その知識を実施に適用するために、『言語運用の体系』を発達させる。」（[18] [上] p.43）但し、チョムスキーの次のような警告は彼を理解するさいに常に留意しておかなければならない。つまり、「問題は生得的な構造が、学習の前提条件であるかどうかを知るのではなく、それがなんであるかを知ることであり、また、この問題について文献が示すことは明らかであり、はっきりとしている。まさにこの理由から、私は自分の考えを主張するにあたっては、『生得性の仮説』という表現を一度も使用しなかった……。」（[18] [下] p.342）ところでトゥルミン（S. Toulmin）は、ピアジェとチョムスキーの見解として、「ピアジェは『知能の機能だけが遺伝する』と表明し、チョムスキーはこれに反して（*per contra*）『人間の言語』は、目や心臓とおなじように、特殊な生得的構造をもつ『心的器官』であると主張している。」（[18] [下] p.305）ちなみに、トゥルミンの立場は、中間的なものである。「これに対してわれわれは、ここに示されているようなふたつの立場が受け入れられない可能性を、真剣に検討すべきであろう。そうすれば、この極端な立場の中間に道を開く、心的能力の発達の説明に到達するであろう。」（[18] [下] p.305）つまり、「ピアジェの主張に反して、言語を学ぶ能力は、すべての幼児が生得的な、つまり『中枢神経に組みこまれた（*wired in*）』、きわめて特殊な『能力』をもっているという事実に依存すると確かに想定すべきである。確かに、このような『生得的』能力の存在とは無関係な神経学的証拠が存在する。しかしチョムスキーが子どもに与えた特定の能力は、なにがそれらの神経学的対応物でありうるかを考えるのが困難に思われるということはべつにしても、あまりに特殊でありすぎて、真実らしく思えないのである。」（[18] [下] p.306）

- (24) 大森は一元論の立場から次のように述べる。「だからわれわれは『こと抜き』で『物』を知覚することはできない。『こと』を見ないで『物』を見ることはできず、『こと』に触れないで『物』に触れることはできないのである。テーブルの上のナイフとフォークを見ることは同時にその布置、例えばナイフがフォークの右手にある『こと』を見ることである。ナイフを手にすることは同時にそれが冷たく重く滑らかである『こと』に触れることである。ここで再び、いやそれらの『こと』は『見て知り』『触れて知る』のだという人があれば、では何も知ることなくただ見、ただ触れる、とはどういうことであるのかを教えてください。」（[17] p.181）
- (25) スキナー（B. Skinner）は、オペラント（operant）型として有機体の行動が積極的に環境に働きかける反応を指摘した。「科学が予測を目標としている単位はたった一回の反応ではなく、反応のクラスである。「オペラント」という用語はこのクラスを記述するために用いられる。この用語は行動が結果をもたらすため環境にオペレイトする（＝働きかける）ことを強調するものである。」（[25] p.

65. 訳書 p. 77) オペラントあるいは道具的条件づけとは、ある反応が環境に影響を及ぼすことによりそれらの反応が学習されるのである。古典的条件づけのように、ただ単に刺激に対して反応するだけではなくて、環境にある変化を生じさせるというやり方で行動するようになる。つまり特定の行動が特定の目的の達成手段であることを学習するのである。例えば、赤ちゃんがフギャー・フギャーと泣くのも親の注目を引くためであり、親がそれに応じて、毎回、赤ちゃんをあやせば、その赤ちゃんはさらに頻繁にフギャー・フギャーと泣くようになる。

- (26) 大庭は、クワインのセンス・データについての考えを次のように述べる。

「〈直接に〉つまり如何なる媒介もなしに“与えられる”もの、これが、かつての経験論的な伝統の中ではセンス・データ [感覚与件] と称されたわけでありましたが、いまやクワインは、そうした伝統と訣別いたします。と申しますのも『無媒介の経験』なるものは、『経験』と呼ばれうるだけの領域を形成しえず、『与えられている』ないし『経験されている』ものである限り、それらは、(痛みのような“内的感覚”の場合であってさえ) なんらかの仕方でも外物に言及することによって、はじめて『与えられ』ないし『経験されて』いるものでありうる、このことを明確に捉えかえしたからであります。」([16] p. 194) さらにクワインは、言語の社会性を踏まえて、「日常的事物をてがかりに」と題された節において次のように述べる。「物理的事物についてわれわれが常識的に語るときには、感覚にさらに密着した仕方でも説明したところで得るところがない。存在物と認めることは手近なところで始まる。概念的な物のとらえ方のそもそもの始めにおいて、凝縮の起こるのは一瞥された事物のほうであり、一瞥する作用のほうではない。この点について驚く (wonder) べき理由はほとんどない。われわれは皆、間主観的であることがはっきりしている状況で語を発するという観察可能な他人の行為を通して、自己の言語を学ぶのである。言語的に言えば、したがって概念的に言っても、もっとも鮮明な事物とは、公的に語るに足るほど公的で、ありふれてよく目立つためにしばしば口にされるものであり、感官に近いために名前を聞いただけで直ちにそれとわかり学習されるようなものである。語がなによりもまず適用されるのは、まさにこのような事物である。」([21] p. 1. 訳書 pp. 1-2) こうしてクワインは、素朴实在論の立場に立ちながらも、言語が形成されるさいの社会的影響を強調し、純粋な経験論を批判するのである。

- (27) オースティンは、「曖昧さ」についてのエヤーの見解を次のように述べる。「そこで、エヤー自身のことによって (但し私の圏点を加えて) それを提示することにしよう。例えば彼はこう言う。『感覚与件を指示する文の意味は、その文と当の感覚与件とを対応させる規則によって精密に <precisely> 規定されるのであるが、このような精密さ <precision> は、物質的なものを指示する文の場合には得られない。なぜなら、そのような文が表現する命題の場合には、感覚与件についての命題の場合とは違って、それが真であるための必要かつ十分条件となるような、観察可能な事実がないからである。』([2] p. 110. 訳書 p. 106) また、こうも言う。『……物質的なものの指示は、現象への適用において曖昧 <vague> である……』([2] p. 242. 訳書 p. 241) さて、これらの文章が正確に何を意味しているのかは、あまり明確ではないかもしれない。だがそれでも、感覚与件についての言明は — そのような言明はすべて — ある仕方なりある意味なりで精密であり、他方それと対照的に、物質的なものについての言明は — そのすべてが — ある意味なりある仕方なりで曖昧だ、ということが言われているのは、十分明らかである。」([3] pp. 124-125. 訳書 pp. 174-175) このような論議は、基本的には文についてであるが語についても適用できる。対象について直接表現できるのは、物的対象ではなく感覚刺激である。しかしながら我々は言葉で表現するときには、我々の感覚刺激を表現するときもあれば物的対象を指示することもある。「熱い水」は、その水に触れたとき感じる「熱い」という感覚刺激を伝えるだけではなく、そこに「冷たい水」ではなく、「熱い水」があることも伝えたいのである。オースティンは、「『曖昧』であると言ってよいのは、普通、ことば自体ではなく、ことばの使用 <uses> である。」([3] p. 126. 訳書 p. 177) とする。そして言葉に曖昧さを感じるのは、「……それらのことばが、『物質の対象』言語に現われることにあるのではなく、それらが日常言語に現われることにある。日常言語においては、あまりに細かい区別は全く面倒なだけなのだ。それらと対照さ

れるべきものは、『感覚与件』語ではなく、『厳密科学〈*exact sciences*〉』の特殊な用語法である。』 ([3] p.127. 訳書 pp.177-178) しかし経験を表現する語(概念)の曖昧さは、ことばの使用もあるがことば自体からも派生するのである。それは、クワインが述べたような曖昧さである。大庭によれば、クワインは、「語」と「経験」の対応の不明確さを指摘した。長い引用になるが大庭は見事にクワインの意図を彫琢しているので以下にそれを借用する。「人間の幼児は、そのつどの感覚に応じて発声するだけの段階からはじまって、やがて、どういう状況で・どう発語すれば・どう応じられるのか、ということを経験してまいります。クワインはまず、この過程を、i『痛い』といった、いふなれば生理語、ii『赤い』といった現象語、そしてiii『四角い』といった、いふなれば物理語に即して、〈客観性への引きつけ objective pull〉の過程として分析いたします。客観性への引きつけ、と申しますのは、不断の社会的訓練によって、言語使用が、ひとつには、共通の対象(object)についての発話へと引きつけられていく、ということであり、ひとつには、間主観的に通用する発話へと引きつけられていく、ということでもあります。この〈客観性への引きつけ〉が一応の完成に到達したときに、人は、その文化・社会の担い手となるわけではありますが、物理的な物体についての発話こそが、この客観性への引きつけの一応の完成段階だ、とクワインは申します。(略)かくして、日常サイズの物理的な物体という概念こそが『概念的に最初のもの conceptual firsts』であり、〈客観性への引きつけ〉ないし社会化のさしあたっての到達点である、ということになります。しかし注意していただきたいのですが、クワインが強調しているのは、むしろ、かかる客観性が決して一枚岩ではない、ということなのであります。『物理的な物体』が最初のものであるような概念枠を習得し、物体についての話が通じるようになったとき『コミュニケーションと信念において我一我を結びつける斉一性』が成立するのでありますが、この『斉一性は、語と経験との結合の混沌とした主観的多様性』ないし『混沌とした個人的多様性』のうえに辛うじて『乗っている』にすぎず、この〔語と経験との〕結合は各人ごとに発展しつづける。我々のうちのどの二人であれ、我々の言語を同様に習得する者たちはいないのであり、生きているかぎり、習得し終えることもない』のであります。クワインのこの指摘は、ある意味では全く当たり前のことを言っているにすぎないと思われるかもしれませんが、しかし、ある状況で身体へのある刺激があったとき、そこで発話は斉一的であるが、語と経験との結合は、主観的・個人的に多様である という非対称性こそが、『理論の非決定性・翻訳の不確定性』という、科学論的にも倫理的にも非常に重要な事態の原生地なのであります。』 ([16] pp.195-7) 続けて次のように述べる。「ところで問題は、このような仕方では、発話状況での刺激との対応づけによって習得されるものは、いわば、そのつどの感覚報告ともいふべきものにすぎず、『言語』と呼ぶには余りにも貧弱だ、ということなのであります。習得されるものが、世界について語る言語であるかぎり、過去の経験が現在の時点で動員しうるかたちで“概念化”されていなければならず、そのためにも既に、文を、別の文と対応づけることができているのでなければなりません。従って、ある文を、発話状況での刺激とは別文と対応づけること、クワイの言い方を用いれば、『非言語的な条件づけ』でない『言語内的な連合』、これこそが言語習得の鍵になってまいります。(略) 感覚的な刺激と発話との対応づけという、ごく最初のレベルにおいて既にこうなのでありますから、一般に、直接には知覚できない様々なものについての語を含む言語を習得するさいに、〈言語と実在〉の関係は、二重の〈非一意性〉を免れることは不可能だ、ということになります。すなわち、第一には、言語習得の過程をつうじて 様々な文の連合から生じてくるのは、第一義的には全体として、非言語的な刺激と雑多な仕方で行くしている膨大な言語構築物である という、言語と経験とのリンクの非一意性であり、第二には、先にのべましたように 発話は斉一的であるが、語と経験との結合は、主観的・個人的にも多様である という非一意性であります。』 ([16] pp.198-199) 日常言語を用いることは、むしろこのような非一意性を受容するためである。日常言語のそのような曖昧さは、ときには誤解を招くこともあるが、経済学のような社会的研究分野においては曖昧さゆえに豊饒性を含んでいることが多々あるのである。



## 引用文献

- [1] アインシュタイン (Einstein, Albert) 「物理学と实在」 静間良次訳 (世界の名著 66『現代の科学Ⅲ』中央公論社, 昭和54年)
- [2] Ayer, Alfred J., *The Foundations and Empirical Knowledge*, The Macmillan and Company Ltd., 1940. 神野慧一郎・中才敏郎・中谷隆雄共訳『経験的知識の基礎』勁草書店, 1991年
- [3] Austin, John, *Sense and Sensibilia*, by J. Warnock, Oxford UP, 1962. 丹治信治・守屋唱進共訳『知覚の言語』勁草書房, 1984年
- [4] Chomsky, Noam, *Cartesian Linguistics — A Chapter in the History of Rationalist Thought* (3rd. ed.), Cambridge UP, 2009. 川本茂樹訳『デカルト派言語学』みすず書房, 1976年
- [5] Hanson, Norwood R., *Perception and Discovery — An Introduction to Science Inquiry*, Freeman, Cooper & Company, 1969. 野家啓一・渡辺博村共訳『知覚と発見』紀伊国屋, [上・下] 1982年
- [6] Hume, David, *A Treatise of Human Nature, being as Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects* (*David Hume Philosophical Works*, edited by Green and Grose [1] Scientia Verlag Aalen, 1964) 大槻春彦訳『人性論』岩波書店, [1] 昭和23年 [2] 昭和24年 [3] 昭和26年 [4] 昭和27年
- [7] カント (Immanuel Kant) 『純粋理性批判』篠田英雄訳 岩波書店, [上] 1961年 [中] 1961年 [下] 1962年
- [8] 黒田 亘「I 言語と経験」(『経験 言語 認識 — 新・岩波講座 哲学 2』岩波書店, 1985年, pp. 1-34)
- [9] Locke, John, *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford UP, 1975. 大槻晴彦訳『人間知性論』岩波書店, [1] 1972年 [2] 1974年 [3] 1976年 [4] 1977年
- [10] ローレンツ (Konrad Lorenz) 「現代生物学の立場から見たカントのアプリオリ論」(R. I. エヴァンズ編 日高敏隆訳『ローレンツの思想』思索社, 昭和54年, pp. 221-269)
- [11] McRae, Robert, "IDEA" AS A PHILOSOPHICAL TERM IN THE SEVENTEENTH CENTURY' (Journal of the history of ideas, City College of the City University of New York, 26(2), 1965, pp. 175-190)
- [12] Mulkay, Machael, *Science and the sociology of knowledge*, George Allen & Unwin Ltd., 1979. 堀 喜望・林 由美子・森 匡史・向井 守・大野道邦共訳『科学と知識社会学』紀伊国屋書店, 1985年
- [13] ニーチェ (Friedrich Nietzsche) 『権力への意志 — すべての価値の価値転換の試み —』原 佑訳 (ニーチェ全集 第11・12巻) 理想社, [上・下] 昭和37年
- [14] 野家啓一編『哲学の迷路 — 大森哲学・批判と応答 —』産業図書, 昭和59年
- [15] Ogden, Charles, & Richards, Ivor, *The Meaning of Meaning (Fourth edition revised)*, Routledge & Kegan Paul Ltd., 1936. 石橋幸太郎訳『意味の意味』新泉社, 1982年
- [16] 大庭 健『はじめての分析哲学』産業図書, 平成2年
- [17] 大森荘蔵『物と心』東京大学出版会, 1976年
- [18] (ピアジェ チョムスキー) ロワイヨン人間科学研究センター編『ことばの理論 学習の理論』藤野邦夫訳 思索社, [上・下] 昭和61年
- [19] ピアジェ (Jean Piaget) 『ピアジェに学ぶ認知発達科学』中垣 啓訳 北大路書房, 2007年
- [20] ポアンカレ (Henri Poincaré) 『科学の価値』吉田洋一訳 岩波書店, 1977年
- [21] Quine, W. van O., *Word and Object*, M. I. T. UP, 1960. 大出 晁・宮館 恵訳『ことばと対象』勁草書房, 1984年
- [22] ———, *From a Logical Point of View: Logico-Philosophical Essays* (Second edition revised), Harvard UP, 1961. 飯田 隆訳『論理的観点から — 論理と哲学をめぐる九章』勁草書房, 1992年
- [23] Rorty, Richard, *Philosophy and Mirror of Nature*, Princeton UP, 1979. 野家啓一監訳『哲学と

自然の鏡』産業図書，平成5年

- [24] Singh, Joseph, & Zingg, Robert, *Wolf-Children and Feral Man* (Archon Books 1966), Harper & Brothers, 1942. 中野・清水共訳『狼に育てられた子』福村出版，1997年
- [25] Skinner, Burrhus F., *Science and Human Behavior*, The Macmillan, 1953. 河合伊六・他共訳『科学と人間行動』二瓶社，2003年
- [26] ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) 「根拠律の四つの根について」(生松敬三・金森誠也訳『ショーペンハウアー全集 1』白水社，1972年)
- [27] \_\_\_\_\_, 「意志と表象としての世界」(西尾幹二訳 世界の名著 続10『ショーペンハウアー』中央公論社，昭和50年)
- [28] 丹治信春『クワイン — ホーリズムの哲学』平凡社，2009年
- [29] 浦上博達「概念体の構造 (2) — 経済哲学のための構想 —」(『城西大学 大学院研究年報』第19号，城西大学，2003年，pp.1-15)